編　修　趣　意　書
（教育基本法との対照表）

※受理番号	学　校	教　科	種　目	学　年
103-88	高等学校	国語	古典探究	
※発行者の番号・略称	※教科書の記号・番号	※教　科　書　名		
104・数研	古探・711	高等学校 古典探究		

１．編修の基本方針

- 生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識・技能を培い、確かな国語力を育成する。
- 我が国の伝統的な言語文化に対する理解を深めるとともに、文化の担い手としての自覚を養う。
- 作品や文章に表現されたものを読み取る、確かな読解力を育成する。

２．対照表

図書の構成・内容	特に意を用いた点や特色	該当箇所
古文分野		
第一章・説話 第一章・軍記物語	社会において個人の価値を認められて活躍した人物の登場する題材を扱うことにより、個人の能力や創造性を尊重する価値観の普遍性について考察できるようにした。（第２号）	44 頁～53 頁 134 頁～143 頁
第一章・歌物語 第一章・日記文学㈡ 第二章・日記文学	和歌を通して表現されている心情を理解することで、豊かな情操を育てられるようにした。（第１号）	54 頁～68 頁 144 頁～149 頁 176頁～197頁
第一章・物語 第二章・物語	登場人物の細やかな心理描写を通して、豊かな情操をはぐくめるようにした。（第１号）	86 頁～101 頁 198頁～231頁
第一章・随筆㈠ 第二章・随筆	宮廷社会での作者の姿を通して、個人の能力を養い、自律した個人として生活する大切さの普遍性が理解できるようにした。（第２号）	68 頁～79 頁 164頁～175頁
第一章・随筆㈡	異なる立場で書かれた随筆を対比することにより、幅広い知識と教養を身に付けられるようにした。（第１号） 激動の時代を生きた中世の出家者の文学を扱うことにより、自己と社会との関わり方について考察を深められるようにした。（第３号）	102頁～117頁
第一章・和歌・歌謡・俳諧	和歌に表現された自然描写を通じて、古来日本で尊ばれてきた自然の美に触れられるようにした。（第４号）	150頁～162頁
第一章・日記文学㈠ 第二章・評論	先人がどのようにして古典文学を尊重しはぐくんできたかを理解できるようにした。（第５号）	80 頁～85 頁 254頁～275頁

第一章・歴史物語 第二章・歴史物語	さまざまな歴史上の人物が登場する題材を扱ったり、異なる立場で書かれた歴史物語を対比して扱ったりすることにより、歴史の伝わり方に対する考察を深め、真理を求める態度を養えるようにした。（第１号）	118 頁～133 頁 232頁～247頁
第二章・説話	漢詩を含む題材や中国故事をもとにした題材を取り上げることにより、日本文学と中国文学の関係性について理解を深められるようにした。（第５号）	248～253 頁
第二章・近世随筆	近世の学者・政治家の文章を通して学問や物の見方について考察することにより、社会の形成と発展に寄与する合理的な態度を養えるようにした。（第３号）	276 頁～281 頁
第二章・近世小説	近世にいたって散文学の素材がどのように変化し、どのようにして享受されてきたかが理解できるようにした。（第５号）	282頁～290頁
漢文分野		
第一章・故事	漢文題材をさまざまな形（訓読・字音直読・現代語訳）で朗読させる課題により、日本語が漢文訓読を取り入れることで発展してきた歴史的背景の理解を深め、日本語と中国語の関係性について理解を深められるようにした。（第５号）	292 頁～299 頁
第一章・漢詩	漢詩を創作する課題を通じて情操を養うとともに、日本で中国の漢詩が受容されてきた歴史的背景への理解を深められるようにした。（第１号・第５号）	302頁～315頁
第一章・史伝 第二章・史伝	古代の中国において個人の価値を発揮した人々の伝記を取り上げることにより、個人の能力や創造性を尊重する価値観の普遍性について考察できるようにした。（第２号）	316 頁～333 頁 396頁～417頁
第一章・思想	さまざまな思想家の考え方を取り上げることにより、幅広い知識と豊かな情操を養えるようにした。（第１号） 道家・法家と儒家の思想を対比する形で扱うことにより、自己と社会との関わり方について考察を深められるようにした。（第３号）	336 頁～355 頁
第一章・文章 第二章・文章	我が国で古くから名文の手本として読み継がれてきた漢文作品を取り上げることにより、伝統的な言語文化を尊重する態度を養えるようにした。（第５号）	358 頁～365 頁 418頁～427頁
第二章・逸話	我が国で古来読み継がれてきた『蒙求』に由来する逸話三編を取り上げることにより、日本文学と中国文学の関係性について理解を深められるようにした。（第５号）	372 頁～379 頁

第二章・小説	我が国の近代小説に影響を与えた中国の古典小説を取り上げることにより、日本文学と中国文学の関係性について理解を深められるようにした。（第５号）	380頁～395頁
第二章・古体詩	我が国の古典文学に大きな影響を与えた「長恨歌」等の作品を取り上げることにより、日本文学と中国文学の関係性について理解を深められるようにした。（第５号）	428頁～446頁

３．上記の記載事項以外に特に意を用いた点や特色

- 学校教育法第５１条２号「一般的な教養を高め、専門的な知識、技術及び技能を習得させること」を踏まえ、古典の理解を深めるために役立つ知識事項を「古文図録」「漢文図録」として巻頭巻末に掲載した。また、知っておきたい国語的教養に関する「ズームアップ」「解説」（コラム）を随所に掲載した。
- 学校教育法第５１条第３号「社会について、広く深い理解と健全な批判力を養い、社会の発展に寄与する態度を養うこと」を踏まえ、各教材末の設問では、我が国の言語文化を多角的な視点から考察できる設問を多数用意した。

編 修 趣 意 書

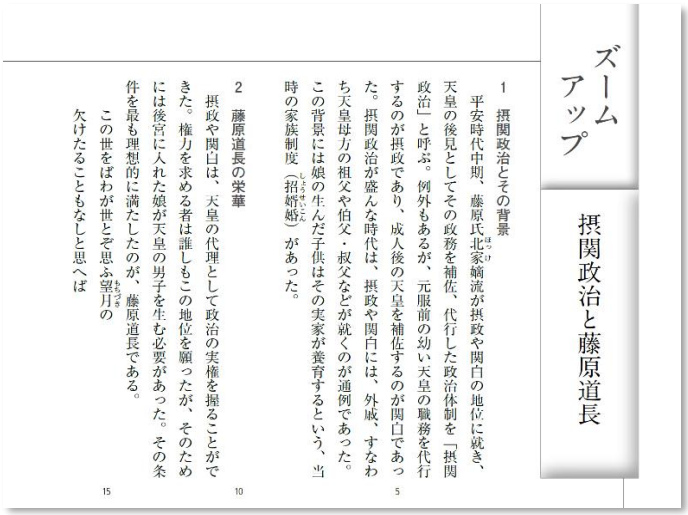
（学習指導要領との対照表，配当授業時数表）

※受理番号	学 校	教 科	種 目	学 年
103-88	高等学校	国語	古典探究	
※発行者の番号・略称	※教科書の記号・番号	※教 科 書 名		
104・数研	古探・711	高等学校 古典探究		

1. 編修上特に意を用いた点や特色

■全体

・ 言語文化をさまざまな角度から考察したコラム「ズームアップ」を随所に収録した。



ズームアップ

摂関政治と藤原道長

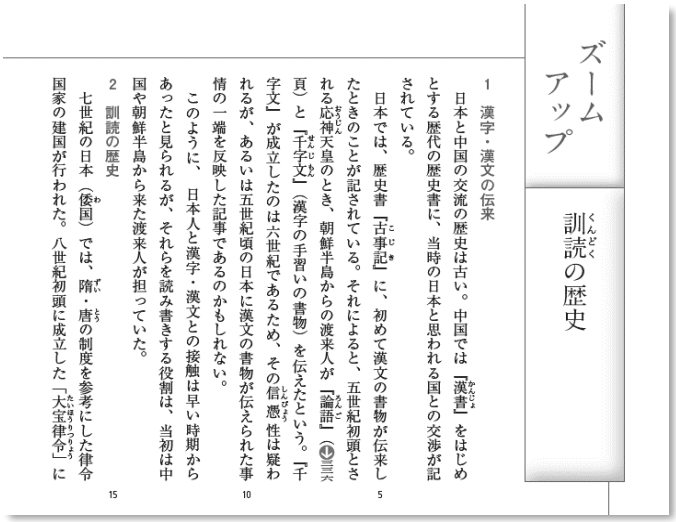
1　摂関政治とその背景

平安時代中期、藤原氏北家嫡流が摂政や関白の地位に就き、天皇の後見としてその政務を補佐、代行した政治体制を「摂関政治」と呼ぶ。例外もあるが、元服前の幼い天皇の職務を代行するのが摂政であり、成人後の天皇を補佐するのが関白であった。摂関政治が盛んな時代は、摂政や関白には、外戚、すなわち天皇母方の祖父や伯父・叔父などが就くのが通例であった。この背景には娘の生んだ子供はその実家が養育するという、当時の家族制度（招婿婚）があった。

2　藤原道長の栄華

摂政や関白は、天皇の代理として政治の実権を握ることができた。権力を求める者は誰しもこの地位を願ったが、そのためには後宮に入れた娘が天皇の男子を生む必要があった。その条件を最も理想的に満たしたのが、藤原道長である。

この世をばわが世とぞ思ふ望月の
欠けたることもなしと思へば



ズームアップ

訓読の歴史

1　漢字・漢文の伝来

日本と中国の交流の歴史は古い。中国では『漢書』をはじめとする歴代の歴史書に、当時の日本と思われる国との交渉が記されている。

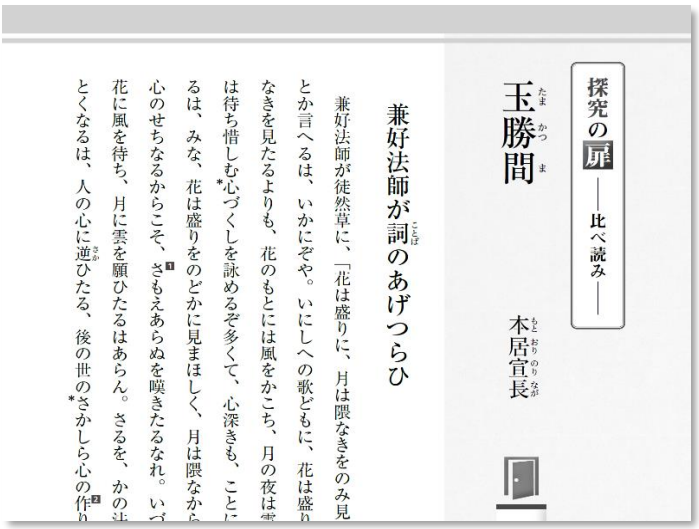
日本では、歴史書『古事記』に、初めて漢文の書物が伝来したときのことが記されている。それによると、五世紀初頭とされる応神天皇のとき、朝鮮半島からの渡来人が『論語』（◆三六頁）と『千字文』（漢字の手習いの書物）を伝えたという。『千字文』が成立したのは六世紀であるため、その信憑性は疑われるが、あるいは五世紀頃の日本に漢文の書物が伝えられた事情の一端を反映した記事であるのかもしれない。

このように、日本人と漢字・漢文との接触は早い時期からあったと見られるが、それらを読み書きする役割は、当初は中国や朝鮮半島から来た渡来人が担っていた。

2　訓読の歴史

七世紀の日本（倭国）では、隋・唐の制度を参考にした律令国家の建国が行われた。八世紀初頭に成立した「大宝律令」に

・ 作品や文章の理解を深めるため、収録作品との比較読読解用教材を収録した「探究の扉」を用意した。



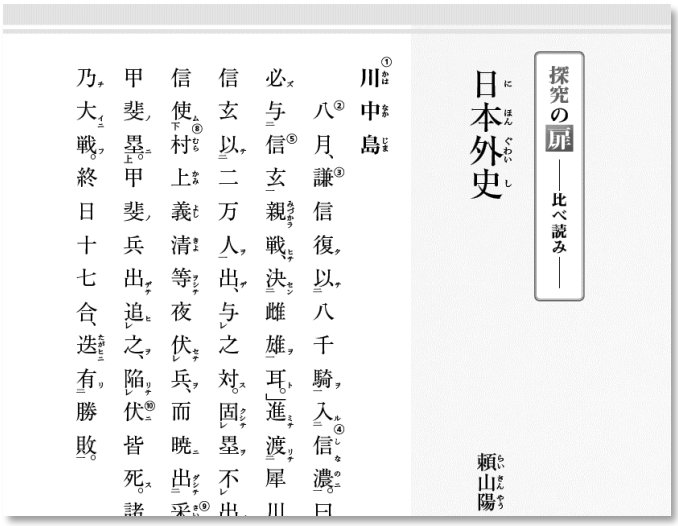
探究の扉 ――比べ読み――

玉勝間

本居宣長

兼好法師が詞のあげつらひ

兼好法師が徒然草に、「花は盛りに、月は隈なきをのみ見とか言へるは、いかにぞや。いにしへの歌どもに、花は盛りなきを見たるよりも、花のもとには風をかこち、月の夜は雲は待ち惜しむ心づくしを詠めるぞ多くて、心深きも、ことにるは、みな、花は盛りをのどかに見まほしく、月は隈なから心のせちなるからこそ、さもえあらぬを嘆きたるなれ。いづ花に風を待ち、月に雲を願ひたるはあらん。さるを、かの法とくなるは、人の心に逆ひたる、後の世のさかしら心の作り



探究の扉 ――比べ読み――

日本外史

頼山陽

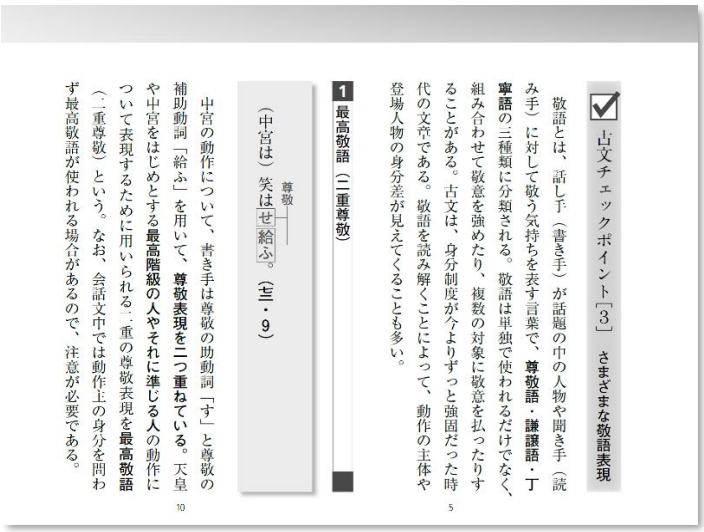
川中島

八月、謙信復以八千騎入信濃。曰
必与信玄親戦決雌雄耳。進渡犀川
信玄以二万人出、与之対。固塁不出
信使村上義清等夜伏兵、而暁出采
甲斐畏甲斐兵出追之、陥伏皆死。諸
乃大戦終日十七合、迭有勝敗。

■古文第一章・古文第二章

・ 古典文法の体系的な学習ができるような題材を配列し、その文法事項の確認ができる「古文チェックポイント」を用意した。

・ 語彙力を養成できるよう、重要古文単語をまとめて、予習復習の一助とした。



古文チェックポイント［3］　さまざまな敬語表現

敬語とは、話し手（書き手）が話題の中の人物や聞き手（読み手）に対して敬う気持ちを表す言葉で、**尊敬語・謙譲語・丁寧語**の三種類に分類される。敬語は単独で使われるだけでなく、組み合わせて敬意を強めたり、複数の対象に敬意を払ったりすることがある。古文は、身分制度が今よりずっと強固だった時代の文章である。敬語を読み解くことによって、動作の主体や登場人物の身分差が見えてくることも多い。

1 最高敬語（二重尊敬）

（中宮は）笑はせ給ふ。（ヒ・9）

尊敬

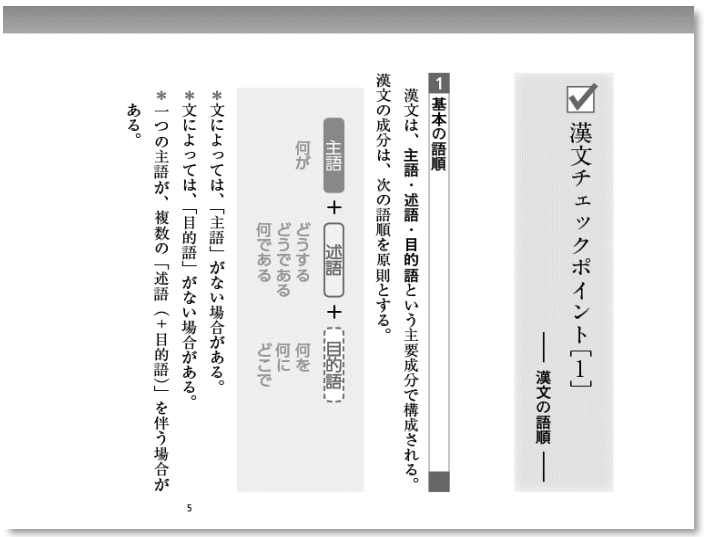
中宮の動作について、書き手は尊敬の助動詞「す」と尊敬の補助動詞「給ふ」を用いて、**尊敬表現を二つ重ねている**。天皇や中宮をはじめとする**最高階級の人やそれに準じる人**の動作について表現するために用いられる二重の尊敬表現を**最高敬語**（二重尊敬）という。なお、会話文中では動作主の身分を問わず最高敬語が使われる場合があるので、注意が必要である。

10

5

■漢文第一章・漢文第二章

・ 漢文特有の語順とその訓読処理について解説した「漢文チェックポイント」を設け、漢文読解が円滑にできるように配慮した。
・ 地図資料を多用して、題材に関連した中国の地名等についてすぐに確認できるように配慮した。
・ 漢文重要語と句法をまとめ、読解に必要な知識が予習・復習しやすいように配慮した。



漢文チェックポイント［1］

――漢文の語順――

1 基本の語順

漢文は、**主語・述語・目的語**という主要成分で構成される。漢文の成分は、次の語順を原則とする。

主語（何が）＋述語（どうする／どうである／何である）＋目的語（何を／何に／どこで）

＊文によっては、「主語」がない場合がある。
＊文によっては、「目的語」がない場合がある。
＊一つの主語が、複数の「述語（＋目的語）」を伴う場合がある。

5

2. 対照表

図書の構成・内容		学習指導要領の内容				該当箇所［頁］
		知識及び技能		思考力，判断力，表現力等 A 読むこと		
単元	教材	(1)	(2)	(1)	(2)	
古文 第一章						
説話	大江山	ア・ウ・エ	イ	イ・ウ	ア	44
	兼盛と忠見	ア	イ	イ・カ	ア	46
	用枝の篳篥	ア・ウ	イ	イ・ウ	ア	48
	古文チェックポイント1　係助詞の用法	ア	イ			50
	【ズームアップ】説話文学	イ	ア			52
歌物語	初冠	ア・エ	イ	イ・エ	イ	54
	通ひ路の関守	ア	イ	イ・ア		55
	渚の院	ア	イ	イ・オ	ア	57
	をばすて山	ア	イ	ア・オ	ア	60
	鳥飼の院	ア	イ	イ		62
	古文チェックポイント2　まぎらわしい語の識別	ア	イ			64
	【ズームアップ】十世紀の物語	イ	ア			67
随筆（一）	春はあけぼの	イ	ア			68
	すさまじきもの	ア	イ・ウ	イ・ク	カ	69

	御前にて人々とも	ア・エ	イ	イ・エ		72
	大納言殿参り給ひて	ア	イ	ア・イ		74
	古文チェックポイント3　さまざまな敬語表現	ア	イ・ウ			76
	【ズームアップ】随筆文学	イ	ア・エ			78
日記文学(一)	東路の道の果て	ア	イ	イ		80
	物語	ア・イ	イ・エ	イ・キ	オ	82
	【ズームアップ】受領層の娘たち	イ	ア			85
物語	光源氏誕生	ア	イ	イ・オ	ア	86
	藤壺の入内	ア	イ	イ		90
	小柴垣のもと	ア	イ	イ		92
	【ズームアップ】『源氏物語』の魅力	イ	ア			98
随筆(二)	ゆく河の流れ	エ		イ		102
	養和の飢饉	ア	イ・エ	ア・エ	ア	104
	閑居の気味			イ		107
	あだし野の露	ア	イ	ア・イ・カ	ア	110
	九月二十日のころ	ア	イ	イ		112
	花は盛りに	ア	イ	イ		114
	【探究の扉】兼好法師が詞のあげつらひ	ア	イ・エ	エ	イ	116
歴史物語	雲林院の菩提講	イ	ア			118
	花山天皇の出家	ア	イ	ア・イ		120
	三船の才	ア	イ	ア・イ		124
	道長の剛胆	ア	イ	イ		125
	南院の競射	ア	イ	イ・ウ	ア	130
	【ズームアップ】摂関政治と藤原道長		ア			132
軍記物語	忠度の都落ち	ア	イ	イ・オ	ア	134
	壇ノ浦	ア	イ	イ・オ	エ	138
	【ズームアップ】文学と歴史の間	イ	ア・エ			142
日記文学(二)	なべて世の	ア・イ	イ・エ	イ・キ	オ	144
	大原まうで	ア	イ	イ・キ		146
	【ズームアップ】和歌にまつわる常識	エ	ア			148
和歌・歌謡・俳諧	やまと歌は・六歌仙	ア・エ	イ	イ・オ	ア	150
	和歌・歌謡	イ・エ	イ	イ・オ	ア	152
	江戸俳諧・発句	エ		イ・ウ・オ		159
	【ズームアップ】連歌という文芸	イ	ア			162
古文 第二章						
随筆	二月つごもりごろに	ア	イ	イ		164
	【探究の扉】清少納言がこと	イ		ク	イ	166
	鳥の空音	ア	イ	イ		168
	宮に初めて参りたるころ	ア	イ	イ	ア	170
	古文チェックポイント4　二種類の用法を持つ敬語	ア	イ・ウ			174
日記文学	父の離京	ア	イ	ア・イ		176
	うつろひたる菊	ア	イ	ア・イ	ア	178
	鷹	ア・エ	イ	イ		181
	土御門邸の秋	ア	イ	イ		183
	水鳥の足	ア	イ	イ	ア	186
	同僚女房評	ア	イ	イ		188
	薫る香に	ア	イ	イ		190
	鎌倉への出立	ア	イ	イ		194
	【ズームアップ】日記文学の展開	イ	ア			196
物語	車争ひ	ア・エ	イ	イ・エ	ア	198
	須磨	ア・エ	ア・イ	イ・エ	ア	202
	明石の姫君入内	ア	イ	ア・イ		207
	紫の上の苦悩	ア	イ	イ		211
	柏木と女三の宮	ア		イ		214
	紫の上の死	ア	イ	イ		218
	浮舟	ア・エ	イ	イ		222
	継母の策謀		ア・イ	イ・キ	オ	227
	【ズームアップ】『源氏物語』以降の物語	イ	ア			230
歴史物語	貫之と躬恒	ア・エ	イ	イ		232
	道真と時平	ア	イ	イ・ウ	ア	234
	村上天皇と安子		イ	イ		239
	最後の除目	ア	イ	ア・イ		242
	【探究の扉】兼通と兼家	イ		ク	イ	245
説話	菅原道真	エ		イ		248

	王昭君	ア	イ	イ		250
	【探究の扉】王昭君（西京雑記）		ア	ク	イ	252
評論	清少納言と紫式部	ア	イ	イ		254
	文	ア	イ	イ・エ・カ	ア	258
	本歌取り	ア	イ	イ		260
	俊成自讃歌のこと	ア	イ	イ		262
	独り雨聞く秋の夜すがら	ア	イ	イ		264
	【ズームアップ】中世の和歌	イ	ア			266
	もののあはれを知る	ア	イ	イ		268
	行く春を・岩鼻や	ア	イ	イ		270
	秘すれば花	エ	イ	イ		273
近世随筆	師の説になづまざること	ア	イ	イ		276
	【ズームアップ】近世の出版文化	イ	ア			279
	花	ア	イ	イ・ク	イ	280
近世小説	世界の借屋大将	ア		イ・カ	ア	282
	浅茅が宿	ア	イ	イ		286
漢文 第一章						
故事	買履忘度			イ		292
	漱石枕流			イ		293
	華歆・王朗			イ		294
	画竜点睛			イ		295
	江南橘為江北枳			イ		296
	【ズームアップ】訓読の成立		ア・ウ		エ	298
	漢文チェックポイント1　漢文の語順	ウ				300
漢詩	中国の詩	ウ・エ		ア		302
	日本の詩	ウ・エ	ア	ア		310
	【ズームアップ】漢詩を作ってみよう	イ・ウ・エ	ア・エ		ウ	313
史伝	鴻門之会			イ	ア	316
	四面楚歌	ア		イ		324
	項王自刎				ア	327
	【ズームアップ】項羽と劉邦	ア	エ			330
	漢文チェックポイント2　兼語文	ウ	イ			334
思想	論語			イ		336
	孟子	イ		ア・イ		338
	荀子	イ		ア・イ・カ		342
	老子	ア		イ		344
	荘子			イ・エ		347
	韓非子			イ		350
	【探究の扉】未来に備える遺伝子			オ	キ	352
	【ズームアップ】諸子百家	ア		エ		355
	漢文チェックポイント3　前置詞	ウ	イ			356
文章	漁父辞			ア・イ		358
	桃花源記	ア		ア・イ		361
	売油翁			ア・イ・エ		364
	漢文チェックポイント4　後置修飾語	ウ	イ			366
	【ズームアップ】道家思想とその影響	イ		エ		368
漢文 第二章						
逸話	知音	ア		イ		372
	梁上君子			イ		374
	三横	ア		イ		376
	【ズームアップ】『蒙求』の受容		ア	エ	オ	378
小説	売鬼			イ		380
	人面桃花	ア		イ・ウ		383
	酒虫			イ		387
	落雷裁判	ア		イ		390
	【ズームアップ】中国の小説	イ	ア・エ	エ		393
	【探究の扉】義訓と振り仮名	エ	ウ	キ・ク	オ	394
史伝	伯夷・叔斉			イ		396
	【ズームアップ】司馬遷と『史記』	イ	エ	エ		400
	廉頗・藺相如	ア		イ		402
	荊軻			イ		408
	【探究の扉】日本外史	イ	ア	エ・ク	ア	415
文章	捕蛇者説			イ		418
	師説			イ		422

	【ズームアップ】唐宋八家の文章	エ	ア	ア		426
漢詩	古体詩			ア・イ・ウ		428
	【ズームアップ】唐の繁栄と衰退	イ		イ		442
	【探究の扉】漢文と日本文学		ア	エ・ク	ア	444